

## 施設紹介

## 山梨医科大学の全貌

熊澤光生\*

循環制御誌編集部から、山梨医科大学の施設紹介をしてくれないかのご要望があり、新設国立医科大学がどのような環境で、現在どのように動き始めているかを皆さんに知っていただくべく筆を取った。

山梨医科大学は、福井医科大学、香川医科大学と共に、国の「1県1医大、無医大県解消」の方針に沿って、沖縄を除けば医学部または医科大学の無い最後の3つの県として、昭和49年度政府予算案に、国立医科大学設置調査費が計上されたことに始まった。もちろんそれ以前から地元の方々から、医大設置に対する強い要望と協力があつたことが大きな力になった。その後、昭和52年6月に、高安久雄東京大学名誉教授が学長予定者・創設準備室長に発令されたことに引き続き、岩井正二、竹内正の両先生がそれぞれ副学長予定者として発令され、教官人事を含む諸準備が進められた。昭和55年4月に開校し、第1回入学式が行われ、58年10月に附属病院が開院し、現在丁度開院1年を迎えるところである。



\*山梨医科大学麻酔科学教室

山梨医科大学の所在地は、山梨県中巨摩郡玉穂村で、国鉄中央本線の甲府駅から南へ約8km、タクシーで2,000円弱の所である。山梨県の人口は、全県でわずか80万人で、全国では人口の少ない方から鳥取、島根、福井に次いで第4位である。県庁所在地の甲府市は東京都心より西方約100kmにあり、新宿より国鉄特急や中央高速で2時間弱の所要時間を有し、人口は20万人である。特産はぶどうとワイン、貴金属宝石類の加工、印鑑、鹿皮の加工製品である印伝、などが全国的に有名である。昭和61年には、甲斐路国体が本県で開かれる予定で、競技場や道路の整備が急がれている。国体の主催順位としては、ブービー賞に値する位置からも推定できるように、人口や経済力から生じる県勢もそれほど強いとは思われない。甲府市からどちらを見ても山また山の盆地で、南は名峰富士、東は秩父連峰、北に八ヶ岳、西は南アルプスの山々によって囲まれている。富士五湖や昇仙峡、数多くの温泉郷があり観光地としても有名である。気候は、夏は大変暑く、冬は大変寒い雪はほとんどない。空気は清浄で、東京のように鼻口が黒くつまったり、光化学スモッグで目をショボツカせることは全くない。医大の近くに身延線が甲府と静岡県富士市とを結んで走っているが、列車の本数が少なく当てにならない。大学の周囲は田んぼで、コガネ色の稲穂とカエルの声に囲まれている。教職員の官舎は、医大の窓から稲穂の向うに見えるが、それでも歩くと10分弱かかる。先生方は開院以来、新しい建物の中で忙がしく患者と学生を相手に診療と教育に時間のたつのも忘れて働いているが、家族は都会とは真反対のこの環境に不満を高まらせている。したがって、帰宅してからも家族対策にエネルギーを費やすことに

もなる。また子供の教育が理由の筆頭として、淋しく単身赴任で頑張っている先生も多い。医大ができて、この玉穂村も人口が増え、6千人を超えるようになり、来春には、村から町へ呼称が変わることに決まり、色んな意味でホッとしている人も多い。実質的にも大学周囲の市街化調整区域の制限が解かれ町らしくなることが望まれるゆえんでもある。大変マイカーの多い所で、バスや鉄道の発達を抑えている。郊外に駐車場の広いスーパーマーケットがあり、週に1〜2度車で出かけて買い込むという、著者も経験したことのあるアメリカの地方都市の生活に大変似たショッピング形式を取っている人が多い。

大学の敷地面積は22万2千平方メートルと広く（福井医大：27万㎡、香川医大：22万6千㎡）、6年間を通しての一貫教育、診療、研究、看護婦宿舎、スポーツ施設が全てこのなかに納められている。将来武道場などが揃ってくると、医科学生間の体育大会においては本学や他の新設医科大学の学生の成績が飛躍的に向上し、上位を占めることが予想される。反面都会文化からの刺激不足や、都会の汚濁への耐性欠如が、どのような医師を生み続けるかの心配もある。1学年の定員は100名で、現在5学年まで揃っている。そのうち山梨県の高校を卒業した者の数は20, 26, 30, 18, 16で平均2割強である。東京、神奈川をはじめ関東地方の出身者で大部分を占めるが、そのうちどの位の割合で医師として大学に残り、県内の医療施設に就職していくかは、医師過剰時代を迎え、特にこの小さな県においてはわれわれの関心事でもあり同時に解決すべき大問題となることが予想される。

ているのに驚かされる。

来月にはベッド数が120床増え、さらに来春には総計600床となって完成する。県内にすでに存在していた県立、市立、国立を始めとする諸医療機関の患者動向への影響や、医療内容をどのように分担していくかが、必ずしもベッド数が県内に多量に不足していたとは思われないことから考えても、大きな問題となると思われる。なお麻酔科の担当した麻酔管理症例数は、開院1年で約1,100となりそうである。

本大学の各講座は、広く各種の領域を研究テーマに持っているが、山梨県民に肝臓疾患と循環器疾患が多いこともあって、肝臓と循環器に関する研究に力を入れている所が多いのが特徴である。著者の所属する麻酔科学講座も、心臓、なかでも虚血性心疾患と麻酔薬との関係を究めるべく研究を始め、これからもそのような方針で進めたいと思っているが、他講座に各種の方法で循環器に関する研究を進めている所が多いのは、心強い限りである。それらは、順不同で列挙すると、薬理学の橋本敬太郎、第2生理の竹内亨、第1病理の吉田洋二、第2病理の川生明、第2内科の田村康二、第2外科の上野明、眼科の塚原重雄、放射線科の内山晁、小児科の加藤精彦などの各教授の主宰する教室である。これらの教室の間では、すでに8回の山梨医大循環器研究会を開き、お互いの情報交換と研鑽の場に行っている。さらに第1回の卒業生が出る昭和61年には大学院の設置が予定されているが、それを機に循環器系の研究を各講座協力のもとで高め、将来的には循環器疾患の附属研究施設部門を持つ方向への協力態勢を組もうという

	58	11月	12月	59	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
1日平均外来患者数	168	233	256	284	300	322	347	390	409	427	415	
平均ベッド稼働率(%)	17.8	42.4	55.1	57.9	74.5	78.5	68.8	72.0	86.0	86.3	85.7	

昨年10月半ばに321床で開院して以来の附属病院の実績は、上記の表に示すごとく徐々に上昇し、最近では1日平均外来患者数400人強、ベッド稼働率85%を保っている。ちなみに兄弟校の本年8月の1日平均外来患者数は、福井医大が414人、香川医大が405人、ベッド稼働率は福井が85.6%、香川が87.5%だそうで、ほとんど似た数値を示し

話も出ている。

新設医科大学には共通の悩みが各種存在するが、古い大学では難しいことも容易に達成できる点などを含めて色んな良さもある。新設医科大学が将来各領域で活躍する時代が来得ることを強調し、新設医大を代表したつもりで山梨医科大学の現状を報告した。（昭和59年9月末 記）